

## 間合とか、プロクセミクスとか

森記念財団研究員  
脇本敬治

以前フィレンツェのエピファニアを紹介したときに、街中がにぎわい活気に溢れていたことを書いたが、街のにぎわいにも実はイタリアらしさが隠されているようである。

この写真は有名な観光スポット、ポンテ・ベッキオの旧市街側を撮ったものである。エピファニアは年末から続いたクリスマスシーズン最後の祝日で、セールを開始時期でもあるので普段のお休みの日にまして、多くの人がパッセジャータ(散歩)がてらに、街中に繰り出していた。パッセジャータを単に散歩と訳すと、広い文化的な文脈が落ちてしまうが、詳細は別の回に譲るとして、イタリア人にとってパッセジャータは知人とコミュニケーションをとるといって、とても大切なことが含まれている。それほど広くない通りはかなりな高密度で人が居るのだが、よく見ると通りのそこかしこで立ち話をしている人が居る。かなりぎっしりとしたさまは、初詣の浅草仲見世にも劣らない。黒や紺といった地味な服装の人が多く間合も狭いので、遠目には巨大なグレーの塊の様に感じるのである。

旧市街の中心部、シニョーリア広場とドゥオーモを結ぶカルツァイウオーリ通りに行くときさらに密度が増す。ここはデパート「コイン」や華やかなブティックなどが多い、フィレンツェ一番の繁華街。歩行者天国の通りは人で溢れかえり、そこかしこに立ち話の花が咲いているが、人が多すぎてゆっくりシャッターを切れなかったほどである。イタリア人の高密度に集まる様や間合の取り方は、日本人と比べ意外に近いということが分かると思う。

民族により空間の認識や使い方に違いがあることを、アメリカの文化人類学者エドワード・T・ホールがプロクセミクスの言葉を用いて興味深い理論を展開したので、聞いたことがある人は多いのではないだろうか。個人が社会生活を営む上で、他人との間にとる間合は、ごく親しい人との場合(インティメット)、個体として確保したい場合(パーソナル)、あらたまった場合(ソーシャル)、そして講演会の場合など(パブリック)の4段階があり、各文化によりその距離は異なるというものがある。パーソナル・スペースは広く使われる言葉となったが、日本語の「間合」、あるいは「なわばり」という方が分かりやすいかもしれない。

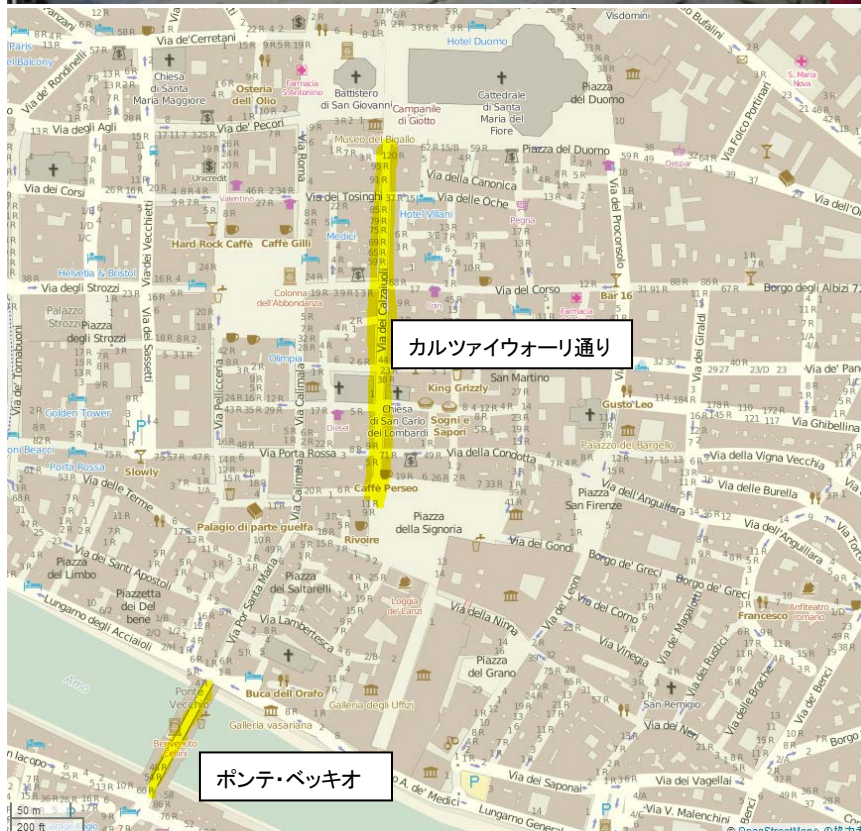
ホールは比較的ゆったりとした間合を取る例としてアメリカを、近い例としてアラブの例を挙げている。ところがアメリカでも、多くの外国出身者が集まるNYに行くと、東洋系が多いチャイナタウンでは間合の取り方が狭い。足を踏み入れた途端に、人の距離が近く、気を付けないと場合によってはぶつかりそうになる。国単位よりも、個人の文化的な背景が大きく影響していると考えの方が適切だろう。

イタリアは日本とは全く異なる文化的な背景を持つが、間合の取り方はアメリカ人よりも日本人に近いのではないかと思う。そして、よく観察するとコミュニケーションの取り方は日本の中でも、

大阪人に近いと思うのだが、どうだろうか。ただし私の場合、話のオチがわかるほど、イタリア語が分からないのが残念なのだが。



ポンテ・ベッキオの旧市街側。中世から変わらぬ橋と街並。パッセジャータの様子もおそらくは変わらない。



シニョーリア広場とドゥオーモを結ぶフィレンツェ一番の繁華街、カルツアイウォーリ通り。デパート「コイン」やブティックなどが多い。車は入れず、歩行者天国となっている。左下はポンテ・ベッキオ。